

令和2年度第1回県立長野図書館協議会議事要録

1 日時

令和2年（2020年）11月11日（水） 午後1時30分～午後3時30分

2 場所

県立長野図書館 会議室

3 出席者

<委員（五十音順）>

渡邊 匡一会長 大口 知子委員 大林 晃美委員 篠原 由美子委員

西山 卓郎委員（ウェブで参加） 棟田 聖子委員

<長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課>

小澤主査

<県立長野図書館>

森館長 中村次長兼総務課長 永野企画協力課長 柳沢資料情報課長 河野情報係長

柳沢主幹 篠田主査 朝倉主査 槌賀主査 町田主任 畔上主事 新井主事 佐藤主事

4 会議次第

(1) 開 会

(2) 館長あいさつ

(3) 委員紹介

(4) 職員紹介

(5) 会長選任

(6) 会議事項

ア 県立長野図書館の現況について

イ 「県立長野図書ビジョン」について

ウ その他

(7) 閉 会

5 会議の概要

(1) 館長あいさつ（要旨）

この4月から館長を務めている森です。

前回協議会は令和元年8月8日だったので、1年3か月ぶりである。この間、昨年10月の台風による災害、今年に入ってからコロナ禍と県民生活を大きく揺るがす出来事が続いており、この状況は今も解消されていない。今後の図書館のあり方を考える上でも、このことは大前提となる。そのようなこともあり、今年の10月に開催した第70回長野県図書館大会は、テーマを「ICT活用と災害に負けない図書館づくり」として初のオンライン開催を行った。メイン会場の安曇野市のほか県内9箇所で開催し、285名の参加をいただいた（公共部会：239名、大学部会：46名）。こうした開催の方法も新しい図書館の姿に向けた第一歩であった。

一方で、県立長野図書館は、平賀前館長のリーダーシップのもとコロナ以前から改革事業を行っていた。ある意味この事態への準備が出来ていた部分もあったし、そうでなかった部分もあった。例えば、デジタルシフトは突然降ってきた話ではなく、もともと目指すべき方向性として必然でもあったと考えている。平賀前館長からは、「5か年の成果を踏まえてビジョンを策定したい。そのビジョンに基づいて改革をさらに進めてほしい。」という宿題を引き継いでいる。この協議会でも前回「ビジョンを作るのでご協力をお願いしたい。」という平賀館長からの挨拶があった。本日のメインの議題として取り上げたいので、よろしくをお願いしたい。

(2) 会長選任

森いづみ会長が令和2年3月末の人事異動により退任となったため、新たに会長の選任が必要となる。

慣例により、委員の皆様の互選で渡邊匡一委員を会長に選任した。

(3) 県立長野図書館の現況について

資料により中村次長及び朝倉主査から説明

(4) 「県立長野図書館ビジョン」について

資料により森館長から説明

(5) 委員との主な質疑応答

質 疑	応 答
<p>・「県立長野図書館概要」の予算のところで、電子ブックを導入した場合、予算はどこに入るのか（西山委員）。</p>	<p>・図書費の中に、広い意味での紙の本のほかデータベース、電子ブックも入るが、令和2年度は予算編成時に想定していなかったため、電子ブックとしての予算は計上されていない（中村次長）。</p>
<p>・統計資料のところで、コロナ禍で色々な人が来られなくなり、なかなか回復しないという説明があった。例えば、この中で登録者数が何人で、アクティブユーザーが何人で、登録だけしている人が何人で、この世代のこのぐらいの頻度で使っていた人が来ていないといった分析をすると、対策を立てやすいのではないかと（西山委員）。</p>	<p>・まさにそのとおりで、統計の重要性を痛感しているところである。アクティブというか、実際に動いている人と休眠になっている人をまず分けないと実態が見えない。コロナ対応も少し落ち着いたので、時間をかけて分析し、この協議会で皆様にご紹介したい（中村次長）。</p> <p>・登録をしているが休眠状態という人も気になるが、そもそも長野県の人口204万人のうちどういう年齢層の人がいて、それぞれの年齢層で登録率がどのくらいかということも全体像を把握するためには必要になる（森館長）。</p> <p>・後半の電子ブックの話題にも関係するが、紙の本がベースのときの分布と、電子ブックが入ることでその分布が変わるのかどうかを分析しながら進めていきたい。電子ブックを導入するならば、どういう年齢層の人に訴える内容のものが効果的なのか、分析結果を以てある程度の予測を立てながら戦略的に入れていく必要がある。重要なお指摘をいただいたので、今後の課題としていきたい（森館長）。</p>
<p>・いつも「概況」を見ていて、登録者数のところを気にしている。私が勤務している市町村立図書館では亡くなっているだろう人もそのまま累計で数に入れている。亡くなった人を消し込んでいたり、3年の更新をしていない人を消し込んでいくと、大きく数が減るのが怖くて、ずっと累計数字にしている。他の図書館でもそういうことはあると思うので、一度正しい実利用者を出したい。県立図書館でこの年からこうしようということで皆で合わせて整理をすると、県全体で正しい数字が出ると思う（大林委員）。</p>	<p>・今「概況」の話が出た。先ほど次長が紹介した配布資料は、「県立長野図書館概要」である。「概況」は、長野県内の公共図書館の統計を全てまとめた統計資料を別に出しており、いずれもウェブサイトで公開している。県全体の状況把握のためには、県立図書館の状況だけではなく市町村を含めた「概況」で見えていく必要があるということだと思う（森館長）。</p> <p>・そもそもこの「概況」自体は見直しをした方がよいポイントがいくつかある。</p> <p>統計は経年変化を見るので、事項を変えるのは難しい面もあるが、設問（調査項目）が現状に合わない部分は変えていく必要がある（新井主事）。</p>

	<p>・統計は、出すことが目的化しがちで、その統計を用いてこれからどのようなサービスをしていきたいかという指標にするには疑問な点もある。全体としてそろそろ見直しをした方が良いと思う。軽々にはできないが、事項の建て方等について相談をしながら取り組んでいきたい（森館長）。</p>
<p>・統計に関して、長野県下で県立長野図書館をどういった地域の人が利用しているかという点がとても重要である。このことも是非分析してほしい（篠原委員）。</p> <p>・電子ブックにしても、親しく図書館を利用する経験がないと、なかなか電子ブックも利用できないと思う。そういった面でも地域を考えた統計をお願いしたい（篠原委員）。</p>	<p>・県立図書館の位置が県北に寄っているので、県の北部の人に利用が集中している。来館サービスを継続していく上でとても重要な視点だと考えている。</p> <p>・この後の話題にも関わることであるが、これまで県立図書館を利用する場合は、一度来ていただいて利用登録をする必要があった。コロナの影響もあり、手続きはせめてオンライン化しようとして取り組んでいる。帳票類の郵送も大変なので、デジタル化するということである（森館長）。</p>
<p>・利用登録をオンラインでしようとしたところ、うまくできない点があった（篠原委員）。</p>	<p>・デジタルで登録しようとしたところ、うまくできなかった事例もあるようであるが、始めたばかりということもあるので、どのようなことが起こったのか教えていただければ対応し、広めていきたい（森館長）。</p>
<p>・「県立長野図書館ビジョン」について、「ミッション」、「ビジョン」の中に「信州」という言葉が出てくるが、今後30年先を考えたときに情報はボーダーを越えていくと思う。県立図書館ということでもあるので、「関係人口」というような概念、「信州に関わってくださった皆さんが」というようなことがあると良いと思う（西山委員）。</p> <p>・また、「バリュー」、「アクション」のところで、この取組自体をどう評価していくかが肝であると思う。記載されている取組は素晴らしいと思うが、これを実際に実行していく段階で、ここをこうしていこう、今はこうであるということのアセスメントというか、見える化していくことが大事だと思う（西山委員）。</p>	<p>・ボーダーレス化していく社会において、県民として税金を納めている人だけではなく、関わってくれる人に、国内だけでなく海外も含めてファンになってもらうことは大事だと思われる。ボーダーレス、フラットというのは、まさにラボが目指してきたものである（森館長）。</p> <p>・県立図書館のビジョンの中で「信州」というキーワードは必要だと考えた。また、「どこからでも」が大事だと考えている。「信州」という言葉を入れるのかどうかは迷うところ。「在住者」に限定するのか、「信州」という言葉を抜くと県立長野図書館にはそぐわないのか、委員の皆様の意見をお聞きしたい。「信州」、「その先」というのは分けて、段階的に実現していくものと、一気にバリアを越えることができるものの両方があるような気がしている（森館長）。</p> <p>・ミッション、ビジョン、バリュー、アクションには、それぞれ想定するスパンがある。特にアクションは、館長の任期など比較的短いスパンで見直し、やりたいことが実現できる、活用できるものにしていきたい（森館長）。</p>
<p>・ビジョンの①にある「信州のどこからでも、すべての人々が等しく情報を入手</p>	<p>・「すべての人が等しく」に込めた思いは、例えば、今回読書バリアフリー法が施行された。実</p>

<p>し」が大事である。今はそうになっていない。また、30年というの遠すぎる。30年を見越してということだと思いが、今からでもいつでも考えてほしい。長野市の周辺の人のみメリットを受けている。市町村の図書館との繋がりも不十分である。まず、「信州の中で等しく情報を」が大事であり、そこがきちんとできた上でボーダーレスという話になる（篠原委員）。</p>	<p>行計画を立てるのはこれからであるが、それ以前から高齢者向けのサービスとか、障がい者向けのサービスとか、本が読みづらい方々、アクセスしづらい方々へのサービスに、図書館は、取り組んできた。</p> <p>館内で議論する中で、そういう方々向けのサービスを個別に事項立てするか、あるいは「今あるサービスが使いづらい方」と大きく捉えて、総合的にバリアを無くしていく方法と考えていくのか、という話をした。一つの解決方法としてデジタル化をすれば、県内の身近に公共図書館のない所に住んでいる山間部の方々にも、信州の外側にいる外国の方々に同じように同じ手段でバリアを無くしていくことができるので、柱にしていきたい。</p> <p>ただ、そればかりではなくもう少し足元を見ないと、何もかもデジタルで解決できるわけではないという部分は丁寧に、まずは信州、身近なところからという視点も両方持って考えていければ良いと思う（森館長）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当館では児童サービスはかなりはっきりとサービスとして立てているが、高齢者の方とか障がい者の方というのは事項としては立てていなかった。読書バリアフリー法ができたことは、一つの契機になる（森館長）。 ・今まで実施してこなかったわけではないが、事項として立てたわけではない。昨年読書バリアフリー法が施行されたことを受けて、そこに特化した事業を何かやるというよりは、色々なバリアがある人々に対してきちんと情報を届けられるようなサービスをこれから実施していく。一個一個を何か事項として立てるのではなく、お互い関連しているので、一緒にやっていければ良いと思う（篠田主査）。 ・30年先というのは、30年後に実現するというよりは、30年経過したら見直さなければならないという意味であり、実現は早い方が良いと考えている（森館長）。
<ul style="list-style-type: none"> ・「信州ナレッジスクエア」もそうであるが、信州というコンテンツを全国どこからでもということになると、「信州をどこからでも、すべての人々に等しく情報を入手してもらえる」ということにはなるのではないと思う（大林委員）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今の話で、「信州大学 VIDION2030」の策定において、渡邊会長が検討された際、「信州を学ぶ」というキーワードを出していたことを思い出した。県立図書館のビジョンを考えると、県という枠組みを外して話すべきかどうかに関して補足のご説明をしたい。 ・ビジョンの①は、県内くまなくサービスが届くよう、整えていくということが主眼である。県の情報格差をまずは図書館として解決するという趣旨は生かさなければならぬと思う。 ・ミッションについては、「信州」を無くしてもよいかもしれない。主語は県立図書館なので、県立図書館が知る権利を守る対象は県立図書館

<p>・ビジョンに関わる立場として、こういう素晴らしいビジョンが形になってから、違う方向へ振れる可能性は極力排除したいと思う。そういう点で、「民主的」という言葉がきちんと謳ってあるミッションはとても重要であるとともに、普遍的な概念でもあるので、ここにある「信州に暮らす」と人々を限定しなくても図書館を利用する人すべてをとすれば、ミッションの中の信州は外しても通用する。</p> <p>・その上で、やはり県立の図書館なので、県のことを考えるという枠組みはある程度は出しておかないといけないと思う（渡邊会長）。</p> <p>・ミッションは普遍的で、この後の全てを支えるものである。今、学術会議のことが問題となっているが、何がこの話の支えになっているかという憲法である。学問の自由とか様々な自由があるからこの学術会議での問題はおかしいという議論ができる。表に出すものは、こういう寄って立つ考え方をきちんと出した上で、それが保障していく事業とかプランという構成であるべきである。</p> <p>・発展系としてあるいはその先にもっと広いものがあるということは分かるが、県立図書館のビジョンとして「県は大丈夫なので世界と繋がります」ということを出すのは皆さん違和感を覚えると思う。当然そうあるべきだと思うし、研究は繋がっているが、県立図書館が自らそれを謳うのは少し違うと思う。お金はどこから出ているのかということになりかねない（渡邊会長）。</p>	<p>を利用する人という理解だから、必ずしも信州の人でなくてもよい。従って、ミッションの中の信州を外してもそんなに信州に住む人の違和感は生まれないのではないかと（森館長）。</p> <p>・ビジョンについては、具体的にこの県の中でどのようにして情報を広く行き渡らせていくかということである。ビジョンのレベルでは「信州」ということは県立図書館として必要であると思う（森館長）。</p> <p>・そのとおりだと思う。地域的な空間的な広がり、それからもう一つ時間軸を考えていきたいと思う（森館長）。</p>
<p>・ミッション、ビジョンが実現したら素晴らしいと思う。子育てに関わる者として関係人口という考え方は良いと思う。その上で、信州で育つ子供たちがより信州を知る契機となるリアルな場、デジタルだけではなく場があることが大切である。信州を知り、好きになる機会の中で育てば、県外に出る機会が多い中で、他の方に信州のことを伝えられる。それ</p>	

<p>が、関係人口に繋がる一つの契機になると思う（大口委員）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デジタルでどこからでもというのは、意識として当然あるが、南北に細長いこの長野県の県立図書館として、今ある場所が長野市であり、中信や南信の人たちから見るとやはりとても遠いものである。時間も距離も遠いという実情がどうしてもあるので、そこを場としてどういうふうに県立図書館を考えるか。情報は発信すればどこからでも受け取れるが、この場を、3階のラボは素晴らしいと思うが、ここに来られない人が長野県民にまだ沢山いるという事実がある。南北に長い長野県の県立図書館のあり方を考えてほしい（棟田委員）。 ・バリューのところに「市町村図書館の下支え」という言葉が書かれているが、図書館大会や色々な情報発信の場に参加できる館は支えていただいていると実感できるが、なかなかこういうところにも出て来られない小さい館が沢山あるので、そういう館の下支えのために県立図書館があるということが実感として伝わる良い言葉があればと思う（棟田委員）。 ・ショーケースというが、人と人が繋がらないとそういった気持にはならない。県内にいくつかサテライト、人と資料が集まる場、人が直接交流できる場を県立図書館で造ってほしい。地域の図書館と協働して地域の人々と一緒に何かをやるとか、実際に人が直接会えるような場を作ることにより、少しずつ関心を持ってもらえると思う（篠原委員）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3階のラボについては、「確かに良いのだけれど、遠くて来られない人が圧倒的に多い。」というご意見をいただいている。 ・ラボは、実験の場であるということ。物理的なこの空間に来ることに意味があるというよりは、そこで起こること、こういうものがあればどんなことが起こるのかを、コピーではなく、その地域ならではのやり方で、参考にして造っていただきたいというショーケースである。
<ul style="list-style-type: none"> ・今、公共図書館で非常勤として働いている人は、県立図書館の職員の人を知らない。地域の図書館も県立図書館の方も皆忙しいのは分かるが、直接会ってお互いに知り合う機会がこれからもっと必要だ（篠原委員）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・例年初任者研修会に皆さんに集まって実施していたものが、コロナ禍で今回集まれなかった。しかし、まさに今、言われたように我々スタッフを知ってもらいたいという思いがあって、DVDを全図書館に配布した。職員が実際に顔を出して話をしている動画をお届けした。我々に親しみを持ってもらえればという思いである（森館長）。 ・例年、初任者研修が行われる5月は、コロナの急性期で、とても集まれる状況ではなかった。また、県内のインターネットの接続状況を考えると、オンラインも難しいということで、いつ

	<p>でも誰でも見られるようにDVDの配布に切り替えた。ガイドンス部分は一方的な配信になり、対話が生まれないのはデメリットであるが、その中に我々の集合写真を入れた。業務別に名前を入れたものである。それをご覧になったことで、いつも電話でやり取りをしていた方、メールに名前が載っている方の顔が分かったと後で聞き、その写真が一番の成果だったと実感している。普段やり取りしている中で顔が見えると良いということがあるが、我々もいつも色々なところに出かけるのも難しいので、この機会にデジタルの力を借りてでも極力顔を会わせる機会を作りたいと考えている。その発展系として、これから「これまでの公共図書館を考える」研究会などを企画しており、今後も顔の見える関係性を作っていきたい（朝倉主査）。</p> <p>・まだ、足りていない部分もあると思う。そこはとても大事だと思っている。コロナが緩和され、私たちがリアルに出かけられるようになったら、出かけていきたい。ただ、物理的・人数的な限界もあるので、デジタルやネットワークの力も使いながら進めていきたい（森館長）。</p>
<p>・県立長野図書館という名称は、県立松本図書館とか県立上田図書館が造られる予定があったのではないかと想像している。長野県立図書館と言わないのはそういう理由で、本当はもっと造る予定であったが手始めの長野で終わってしまった。長野県の歴史の中ではそのような発想がそもそもあり、途中で倒れたということではないか。県立長野図書館というのは不思議な呼び方である（渡邊会長）。</p> <p>・県立図書館をいくつも造らなければならぬと言うのではない。戦後、分県で大騒ぎするような県が1箇所かどうかという状況ではなかったと思う。県立図書館を造るにしても色々な配慮をしながら、計画が立てられたと想像できる（渡邊会長）。</p>	<p>・県立長野図書館は、前身が信濃教育会の信濃図書館である。もともと今の長野市立図書館がある場所にあった。多分、県都である長野市に（県立図書館を設置）というのは流れとしてあった。それをさらに全域に広げていくための県立図書館構想ということがありえたのかもしれない（森館長）。</p> <p>・本日の机上配布資料である「カルデラ」という雑誌に「都道府県立図書館の役割を再検証する」という記事がある。これを見ると都道府県立図書館に期待される役割の類型や、歴史的にどう展開してきたか、ということが出ている。実は、複数の県立図書館を持つ都道府県は図書館が出来はじめた戦後にはそれなりにあったようだ。しかし、廃止されてきて、どちらかというと県立図書館は都道府県に1箇所という流れにある。その流れに逆らって長野県ができるかということ、実際にはなかなか難しいと思う。そうしなくても、別のアプローチでその効果が得られる方法を考えていかないといけない（森館長）。</p> <p>・各自治体でデジタル化を進めていけば、図書館のない自治体も電子ブックがあれば建物はもう造らなくてよいのかと言われることもあるが、そうではない。やはり、リアルな場は大事である（森館長）。</p>

<p>・どこかで考え方を变えるのであれば、3つあるこのビジョン自体を、県立図書館という場所はこのところではなく、ここはあくまで実験をするところであり、ラボ自体が実験で、色々な物を使って色々なことができる実験施設である、実験施設だからどこになければいけないということはないと考えていけばよい（渡邊会長）。</p> <p>・ビジョン③の最後も「人的なサービス体制を整備する」のではなく、そういう人材を育成していく、来てもらって教育していくことが大切である。ここでやっていることは、色々な実験でノウハウを作るところなので、最先端な施設となっている（渡邊会長）。</p> <p>・新しい図書館の姿が出来てきたときは、そこに対応できる新しい図書館員が必要になる。ノウハウを作り、それを広めるといふ図式に変えないと、「人がいるからいいね」、「うらやましい、他にも造って」という話になってしまうのではないか（渡邊会長）。</p>	<p>・県立長野図書館が、「何を」「誰を」対象にするのかという機能と表現の整理、直接的なサービスや人材育成については「波及効果」を高めたいという2つの観点から、修正していきたい（森館長）。</p>
---	--

(6) 委員からの意見や要望

- ・今春新しくされた県立長野図書館のホームページは、大変斬新なデザインでとても見栄えがよい。ただ、実際に使ってみると使いにくいところ、分かりにくいところが多くあるので、今後改善をお願いしたい。
- ・平賀改革をこれまで見守ってきた。危ういものもあつたが、役人的なものが変わってきた。ここを足掛かりに良いものを伸ばしてほしい。
- ・紙媒体の資料がまだ不足している。県立図書館にあってほしいものがまだ不足している。もっと資料を整備してほしい。
- ・本を読む人を育てる必要がある。学校入学後からでは遅いので、もっと早い段階から育てる必要がある。
- ・言葉の分からない段階から絵本に親しむことは非常に重要である。しかし、子育て中のお母さんは図書館には行きにくい。図書館は静かな場所であり、子供は騒ぐので、図書館には連れて行きにくい。そういう点では、信州学び創造ラボには子供を連れて行きやすい場所になってほしいと思っている。素晴らしい場所ができたと感じている。

(7) その他

○任期満了に伴う委員の改選について（中村次長）

- ・現在の皆様方の委員の任期は平成31年1月1日からの2年間で、令和2年12月31日で満了となる。
- ・今後、令和3年1月1日からの2年間の次の任期の委員の改選を行う予定である。
- ・協議会の委員は、図書館法、図書館の設置及び運営上の望ましい基準、県条例により4つのカテゴリー、すなわち学校教育関係者、社会教育関係者、家庭教育関係者、学識経験者の10名以内とし、県教育委員会が任命するとしている。
- ・この他に、県の審議会のルールがあり、審議会には定員の2割以上の公募委員を設け

ることから2名を公募、女性委員の割合を50%とされているので4名を女性としている。この他、図書館としてはこれまでの慣例で委員数は現行どおり8名、地域バランスを考慮して東信、南信等の4広域から1名以上を選出するという中で事務を進めている。

○次期委員の人選にあたり当館として特に重点、留意した点（森館長）

- ・現協議会の任期は12月末までである。本日はこのミッション、ビジョンの策定にあたる第1回の協議会となったが、いただいたご意見を踏まえて修正版に取りまとめ（現委員にはメールで報告する予定）、次期の協議会に引き継いで年度内に確定し、来年度早々には公表したいと考えている。
- ・活字文化の振興は、図書館が役割を果たしていくために非常に大きな存在であり続けると考えている。就学前から人の一生を通じて、様々な図書館が連携しならずと寄り添っていく中で、まさに最初のところがとても重要である。今回のミッション、ビジョンの計画の中に、「読書」というキーワードは入っていないが、「読書」の定義を含めて根本的に見直すということを県の文化財・生涯学習課と話しているところであり、そこはしっかりとやっていきたいと考えている。
- ・今回で篠原委員と大口委員はご退任となる。それぞれ、ご挨拶をいただきたい。また、本日も欠席の町田委員は小中学校長会推薦で来ていただいていたが、年末で退任となり、新たに高校から学校教育関係者として1人入っていただくことになっている。

6 その他

○篠原委員、大口委員からの退任のご挨拶をいただき、会議を終了した。

○その後、「信州・学び創造ラボ」で委員と職員との懇談を行った。